

ひきこもりの子どもをもつ親のエンパワーメントを促す家族会の機能について

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

「モラトリアム人間」「パラサイトシングル」など、親から自立できない子どもが多いとされる一方で、現代社会がこのような状況を容認していると小比木（2001）は指摘する。今、「社会的ひきこもり」といわれる青年が急増しているが、彼らもまた「自立」という発達課題を抱える人たちである。そして、「自立」で立ち止まっているのは子どもだけではない。子どもに自分の姿を投影し、過剰に介入しようとする彼らの親も、子どもからの「自立」という課題を抱えている。

ひきこもりの子どもを抱える家族は、子どもの問題を内に隠し、社会から孤立し、孤独感を感じている。そんな誰にも言えない苦しい思いを、同じ悩みをもつ者が集まる家族会の中で吐き出し、癒されていく。このような特徴に着目し、ひきこもりの子どもを抱える親がエンパワーメントする上で、家族会はどのような役割を有するのかを検証した。

まず、ひきこもりの家族会を他のセルフヘルプグループと比較することによって、家族会の位置付けをした。それは、家族会が「当事者組織」的な会であり、ひきこもっている子どもの問題ではなく、子どもを問題だと感じている親に焦点が当たることを強調するためである。次に、家族会で行われる心理・教育的アプローチが、親に対してどのような役割を持っているのかを記述した。そして、ひきこもりの子どもをもつ母親が、家族会を通してどのようにエンパワーメントされていくのか、自己強化の様子をインタビュー調査で明らかにした。それにより、子どもがひきこもることを通して、親は、以前とは異なる新しい価値観の形成をし、自己変革していること、しかし社会変革に対しては消極的であることが明らかになった。このような結果を専門家との関わりから考えると、家族会の中で専門家 親という繋がりが強いため、親が「～してもらおう」という受身の姿勢をもつようになり、自ら社会に働きかけていく自主性が阻害されているのではないかと考えた。そして、親の社会変革を促していくために、同じ悩みをもつメンバー同士の連帯感を一層強めていくべきではないか、と結論付けた。